

中世前期の城下空間

松 山 宏

はじめに

私は先に守護城下をとりあげ、戦国時代以前に城下町が存在すると述べ、そのさい次の三点を問題とした。第一に、古代の国府ないし府中が中世の鎌倉・南北朝・室町の各時代の守護所になっているか否か。第二に、各時代の守護所はどこにあるか。第三に、室町時代の守護所が戦国時代の城下町に継続しているか、あるいはしていないか。⁽¹⁾

いずれも守護所を主とし、若干国人城下に触れたが、その所在地を重視したのである。城下の空間配置も扱ったが、あるべき典型を推測して列挙するに止まり、具体的に形成されてきた経過をとりあげなかった。しかし時代を異にすれば空間配置も異なり、同じ時代でも地域により様々の景観をとっていた筈である。

そこでこの稿では、城下が周辺村落と異なる空間をつくる経過と集住の実情を追うことにしたい。ただそうはいっても、鎌倉、南北朝、室町の各時代について個々の城下にそれをみることは不可なので、史料所在の時代を中心にみることにならざるをえない。

一、城下研究の問題点

はじめに城下研究の現状とそれに対する私の考えを述べておくことにする。

1、中央都市

中世都市研究の対象とされる都市は多く中央ないし大都市である。これはまず史料の豊富さによる。京都が文献史

料の多いことはいうまでもないが、文献の少ない鎌倉（相模）・平泉（陸中）などでは発掘調査が活発に行われているからである。

ところで都市は非農業民の居住地であり、そこには行政・軍事・宗教・文化・商業・交通などに従事する人々が集住している。その点で村落と異なつた景觀と雰囲気をもっている。そしてその環境をもつともよく整えているのが中央の大都市であれば、そこが最重視されるのも当然であらう。事実都市研究がそこから始まり、そこでの研究が城下研究の手法になつたことは否定しない。

問題は、そのような典型あるいは完成された形態と景觀を重んじる余り、それを地方都市に適用することにある。地方都市も都市である以上、村落と異なつた場を形成している。しかしそれらは多く村落的・農民的様相を残しており、大都市を基準にすると都市といえないとの論も出るだろう。それを警戒したい。未熟であつても村落と異なつた場をつくらうとし、つくりつつあることを見逃すべきでない。

2、戦国城下

城下町研究は活発である。ことに戦国時代から織豊時代ないし近世への移行期が盛んである。現在までの研究をまとめると以下のようなになる。

城下町はまず武士の集住を基本としてつくられる。清須（尾張）にみると、そこへ守護所が移つたのは文明一〇（一四七八）年で、家臣団の集住が始まる⁽²⁾。しかし織田信長の頃をみても守護館と守護代館は独立性を保っている。重臣層の居住域は内堀と外堀の間にあり、各々は溝によつて獨立した方形区画を維持しており、中堀と外堀の間に中小武士層の居住域がみえるに止まつている。弘治元（一五五五）年になつても清須在住数は全武士の七八パーセントにすぎず、多くは在所にあつた⁽³⁾。城下集住は甲府（甲斐）、一乗谷（越前）、府内（豊後）にもみられるが、梁川（磐城）・鴻巣（陸前）では抵抗があつて順調ではない⁽⁴⁾。蒼海（上野）では讃岐・松井・鎌田らの家臣屋敷は不統一な並びだといわれる⁽⁵⁾。

町屋は清須にみると武士と混住である。これ現象は牛久保（三河）・甲府（甲斐）・小田（常陸）・結城（常陸）・鷲山（美濃）、天神山（越後）・見付（越後）・中村（土佐）・

府内（豊後）にもみられる。

惣構えは存在するのと存在しないのがある。清須にはないが、小田・平井（上野）・谷地（羽前）・湯築（伊予）では外堀がつくられている。松倉（越中）では石の門と土の門があり、両者は現存している。ただ惣構えがあってもその内には家臣と直屬商工人がおり、市人などは外におかれる。これは観音寺（近江）・岐阜（美濃）・一乗谷（越前）でも同じである。

また道路がつくられ、幹線を軸に平行しあるいは交わる道がみえる。そのさいT字形、カギ型など防衛が重視され、一本の街路が普通である。

城下町は一國支配の権力の城地であれば、統一への動きと支配のための諸機能を集める動きがあるのは当然である。ただ事実上はそれまでの景観が少なからず残っている。

織豊時代いたると、兵農・商農分離が始まり武士の集住が進む。有岡（摂津）では天正一二（一五八四）年に惣構えがつくられ、長方形街区がみえ、武士と町民が分離される。清須では中小武士が集まり、町屋もみえる。小牧（尾張）では永祿六（一五六三）年に惣構えがつくられ、長方形街区と短冊型地割の町屋がみえる。岩崎（尾張）では天

正一二年に惣構えができ、長方形街区と短冊型地割がみえる。岡崎（三河）では同一八年から武士と町民の分離がある。小田原（相模）では同一一年に土塁と堀で惣構えをつくる。近江八幡（近江）では同一三年頃から侍屋敷と町屋の区分が始まる。惣構えは佐倉（下総）は支城群で、村上（越後）は垣根でつくられる。

地割のために盛土がされる。盛土は旧来の市とか町場、寺院・墓地など旧権力を否定し、新地割をするため施行されたのであろう。安土・清須・石山本願寺などに実施されている。こうして自然条件を克服し道路を付けかえて都市建設をする。

ただ地域差とか政治的条件もあり、直線的に進んだのではない。安土では樂市ができ発令されて町を含む一元化が計られたが、中世の港域はそのまま残されている。春日山（越後）では武士と町人は春日山と府中に分離し、商工人は多く直江津に住している。吉田（安芸）では天正一六年でも町道が田畑の中を通り、家屋は散在している。町屋は固まらず身分住居区は十分でない。また惣構えは川を利用して、岡豊（土佐）は長宗我部氏の城下町であるが、家臣団は散在して在地性が強く、連合軍的である。商工人

は直屬層に止まり、城下は田園的景観をもっている。まだ戦国的なのである。¹⁷⁾

しかし一般的にはこの時代に中小武士の集住があり、惣構えが普及し、ことに天正一三・一四年頃から士商・士農区分がされる。つまり近世化の始まりとみるのである。

このように兵農商分離がされ、町割によって城・重臣・一般武士・下層武士それに寺社・商人・職人を区分して配置し、農民を排除した城下町が実現する。これを典型とする見解から見ると、戦国城下町は遅れたあるいは劣つたものとなる。戦国城下もそうならば、その以前の城下は問題にならないことになる。後年からみれば以前のものはすべて未熟なものとなろう。しかしそれぞれの時代においては必然的なものであつた。戦国城下はその時代においては相応したものであつたのである。城下町は一挙に形成されるのではなく、序々に成つてくる。とすれば戦国以前のものをとりあげることが無駄でない。またそれが政治都市であれば、古代の政治都市の発展と考えられ、そこから国府との比較・差異をみることも重要である。

3、国府・府中

古代の地方都市国府が中世になってどうなるのか、衰退するか発展するかについては少なからざる研究がある。国府は二遷三遷するものが多く一個所に止まっていない。変遷には政治が関わるが交通とか自然条件によるものもある。古代から中世に移る時期には在庁層の力が働いている。筑後国がその一例で式内社の高良神社の勢力と在庁官人の草野・大城両氏の台頭が関係している。¹⁸⁾

鎌倉時代になるとこの傾向は一層すすみ、信濃国では国司四条隆仲の威令が低下し、在庁は命令に従わず検注もうまくいっていない。かれらはみな当世猛将之輩とされてい¹⁹⁾る。おそらく北条氏につながる武士たちだろう。

在庁が武士に結び、武士が在庁に働らきかける場合などがある。下野国では武士化した在庁が目代と共に留守所を成立させている。²⁰⁾ 大隅国では守護が国衛を支配し、在庁を守護所機構に組みこんでいる。²¹⁾ 伊賀・近江・淡路・隠岐の諸国では守護が国司に任命されている。²²⁾

― 守護所を国府ないし、その近傍におくことは少なくない。

遠江・武蔵・上総・越後・長門・淡路・伊予・豊後・大隅・対馬などの諸国である。長門国の「忌宮神社境内絵図」

をみると、守護と守護代が国府を監視しているようである。²³⁾遠江国ではそれぞれの施設は別空間にあつたようだが、共に国府域におかれている。²⁴⁾

もつとも守護に在庁が反発する所もあり、そこでは国府と守護所は別の場所に位置している。尾張とか備中国などがそれである。²⁵⁾

中世になると国府は多く府中と呼称を変える。規模は様々である。本来は国府の延長であるから五町平方とか大きいもので八町平方程度とみられるが、信濃や伊予国でみると郡規模になっている。下野国では数軒、備中国でも同じ広さになっている。また人口も多く、常陸国では鎌倉時代後半に在庁官人と供僧で六二人、各家の親族、従属の商人、雑人、下人を加えると数百から数千になるといわれる。²⁶⁾そしてこれらの居住域を意味する巷の語句がみえる。下野国では館・在庁・惣社が設けられ、倉が建ち工房を営む街区が整備される。陸奥国では府中の四至を祭る社が建ち、東西南北の宮は国府の女関口となる。²⁷⁾国府は四方に出入口をもつ独自の空間となっているのである。丹後府中は守護所であるが、時・法華・禪・律・真言宗などの寺院が多く宗教都市の雰囲気をもっている。²⁸⁾因幡国府では、昭和

四七（一九七二）年から七年間東西八町、南北五町に及ぶ範囲の発掘調査がされた。その結果、官庁・在庁・守護・地頭・御家人の居館群が条坊的地割による道をはさんで門を構え、築地を連ねていることが確認された。また屋敷の中には広い園地に中島を築き、邸宅、所従・下人の住居とみられる二間×二間、三間×三間の堀立小屋が認められ、刀鍛冶・土器作りも確かめられた。町屋があり三斎市もあつたとされる。²⁹⁾筑後国では建武（一三三四―一三八）期に符の五口がみえる。これは木戸・釘貫の類いで、陸奥国と同じくこの内側が都市域である。上町・下町がみえ、三斎市が立った。ここは高良社の隆盛を背景に門前町としても栄えている。

府中が戦国城下になった所としては、駿河・信濃・越前・能登・越後・豊後・対馬などの諸国がある。

ところで国府ないし府中の研究をみて気付くのは、城下との関係にふれていない点である。戦国時代になると指摘されるが、それ以前はその語句を用いない。しかし右にみたように府中の空間配置をみると村落と異なる集落であることが確認できる。そしてそこを支配するのは多く武士である。陸奥とか常陸国は在庁の流れを汲むのだろうが、実

- (24) 義江彰夫「国府から宿町へ―の谷遺跡を手懸かりに見る
中世都市見付の構成と展開―」、『東大教養部人文科学科紀
要』八七輯
- (25) 前掲拙著二八頁。小川信「中世備中国衛と惣社経営」、『国
院雑誌』八九―一一号
- (26) 義江彰夫「中世前期の国府―常陸国府を中心に―」、『国立
歴史研究報告』八号。同「平安・鎌倉時代の国府・府中」
『国史学』一四三―一四三二号
- (27) 入間田宣夫「常陸府中ノート」小川信記念論集『日本政治
社会の研究』
- (28) 小川 信「妙立寺厨子銘にみる中世丹後府中の時宗と法華
宗」、『政治経済史学』二七〇号
- (29) 『国府町誌』二二六一頁

二、城下空間の具体例

ここでは初期城下を地方の武士城館を基に考えてみるこ
とにする。以下とりあげる城下の幾つかはこれまでも述
べた。しかしその後の調査ことに発掘などにより新しい事
実も明らかにされているので、重ねて記すことにする。

古市（大和） もともと福島市が開かれていたが衆徒古

市氏の本拠地となる。古市氏は鎌倉末期にみえ、興福寺大
乘院門跡坊人の衆徒として一乗院門跡坊人の衆徒筒井氏と
並ぶ力をもっていた。衆徒は他国にみる国人に相当する。
嘉吉三（一四四三）年胤仙が官符衆徒の棟梁となった。将
軍任命の大和国守護代であり、これを機に内部体制を固め、
一族や被官の家臣団化を進める。

その後奈良にも進出し、また大乘院門跡経覚の信頼をえ、
文安四（一四四七）年胤仙は経覚を古市城近くの迎福寺に
迎える。経覚はここで文明五（一四七三）年没するまで二
七年間過す。古市城は同年五月「鳴振於古市城舞之」、宝
徳三（一四五二）年二月「自今日於古市城有護摩」にみえ
る。そこはその後政治・軍事の中心となり、ことに文明七
年澄胤のときに大規模な堀をつくり、馬屋五間、風呂など
も新築し、家臣団への統制も強化した。²⁾城内では連歌・茶
会が催され、風流も演じられた。しかし明応二（一四九三）
年に本城が火災にあい、同六年には筒井方に破れて落城し
た。

現在古市小学校の字上の段が城郭の中心部で、その東に
長さ六〇米、幅一〇米、深さ一・四米の堀がある。北にも
堀がのび、南北五〇〇米にも及んでいる。また小学校の南

西ハス池尻・ハス池上にも堀跡があり、東西三〇〇米になつてゐる。古市城の端が環豪集落の周囲に合つてゐるから城を含んだ惣構えでないかとされる。³⁾おそらく澄嵐時代(一四五二—一五〇八)に築かれたものだろう。

ところで、ここでは毎年七月に風流が演じられ長祿二(一四五〇)年七月一日には「今日延命寺・北口者共可有風流之由……自市場……自南口風流来」とみえる。⁴⁾注目したのは北口の者である。口というのは出入口であり、右にみた惣構えにも関係する。つまり城下の口であり、これは城下とその外側の集落が口によつて区分されてゐることを意味してゐる。口の者とはその出入口に居住してゐる者、多分城下区域に居住してゐる者と思うが、かれらを指してゐる。また次の史料がある。「古市地下人」、「古市在家少々尽焼亡」、「古市之在家二宇焼失」、「古市之南口小屋二五、六間焼失」、「古市之北口二居住」などである。⁵⁾地下人とか在家といふのは城下の住民であろう。南口小屋二五、六間焼失は城下にかかりの住民のゐることを示してゐる。先の史料に市場とあるから、ここには市が立ち商工業も営まれていたとみることが出来る。少し後だが、明応元(一四九二)年に古市と藤原之堺に大松がみえる。⁶⁾大木は口と同じ

く城下と村落を分ける目印だったのだろう。そして城下域は堀と惣構えからみて東西三〇〇、南北五〇〇米の広さとなる。住民層は具体的には分からないが、風流参加者からみると、古市一族と被官、縁者、経覚の従者、縁者、延命寺関係者、それに市庭からみて商人・職人・農民そしてこの地が交通要衝であるから馬借などが推定できる。

下津(尾張) 古くから宿であり市もおかれており、室町初期には中町屋・下町屋がみえてゐる。応永一八(一四二一)年には守護代所となつてゐる。清厳正徹(一三八一—一四五九)の『なぐさめ草』に、「爰は家もさる方に類ひろく、国郡の政を行ひ、百姓のかへりみ朝暮にすたれざりしかば、門前市をなせるやうにて、みやこの外の心地もせず」と記される。都と異ならないといふのはオーバーな表現だが、かなり繁栄したところであつたのは事実であるう。

応仁大乱の直前、両斯波の対立から斯波義敏方のものが下津に攻めこもつた。これに対し義廉方は防備を固めたが、その様子を述べた『文正記』に「欲襲下津、大路小路、城門々々槽々」をかためて用心すると記される。大路小路は下津につくられた道路であろう。また城門は城の

門に違いないが、大路小路をみると、下津の出入口つまり物構えの出入口を意味しているように思える。ここは文明八（一四七六）年一月に焼かれ、守護所の機能を失っている。

平成九（一九九七）年一月に現地を訪れ発掘の模様をうかがったが、城趾部分は行っているが城下部分はやっていないとの事であった。

葉梨（駿河） 守護今川範圍が志太郡葉梨莊に直轄領をえてから、恭範が遅くとも至徳元（一三八四）年府中に移るまで、やく五〇年この地は守護所であった。守護所であれば少なからぬ武士がおり、商工業も営まれていたと思われるが、下藪田から西方に至るまで南北四軒、東西一ないし二軒の間に多くの地名が残っている。武士層とみられるものは松井・衣原・矢部・新野・大揚・左近・松田・田中らである。このうち松田・矢部・矢田らは今川家臣として確認されている。寺院は二二あり、そのうち曹洞宗は二二ある。さらに市が三ヶ所、その他金鑄・米丁・矢作などの商工業に関係する地名も二〇ヶ所ある。今川氏が去った後もここは府中の詰の城だったようで、武士や商人がいなくなつたのではない。だがこれらの地名は南北朝時代の景

観を残すものとみたい。

ところで屋敷地名と市・町地名を重ねるといくつかの小空間が考えられる。西方・北方の新野・堀ノ内・殿屋敷などと市場・横町、時ヶ谷・上藪田の来町・立町・堀内などである。これらの空間が相互に一定の機能上の関係を持つ可否かは不明である。地名分布は不規則で分散しており、今川館の求心性ないし徹底性はみられない。また武士屋敷も常時のものでなく守護所出向時の滞在所でないかともいわれる。今川氏の城下経営が半世紀に過ぎなかつたのも関係していよう。地名の広がりからみて、この城下はかなりの広い地域に展開していたとみられる。

石和（甲斐） 現山梨県塩山市千野の慈徳院境内は武田信春館跡とされる。東西やく一〇〇米と南北やく一五〇米の規模があり、周囲に水路、東北隅に幅やく七米の土塁がある。周辺に鹿子屋敷、女中屋敷それに馬場・橋建・郷宿・町屋原・千貫堀の地名がある。館の西側には鎮守天満宮がある。全体の規模は不明だが、城下の萌芽が考えられる。信春は応永二〇（一四一三）年に没した。

かれをついだ信重館は現石和町小石和の成就院境内と伝承される。明確な遺構はなく、文化（一八〇四―一八）年

間成立の『甲斐国志』によると、「南小路・前小路・宿町・
的場・町屋・大門」などの地名と家臣逸見朝俊居跡がある
と記される。堀と土塁に囲まれた館、家臣屋敷と幾つかの
街道、町屋が推定される。信重は宝徳二（一四五〇）年に
穴山氏に討たれた。その後信昌の川田館がみえ、『甲斐
国志』によると、公用屋敷・女中屋敷・大庭・築地・御厩・
の場などの地名が残っている。¹⁰

革手（美濃） ここが土岐氏の本拠として守護所の役割
を果すのは頼忠の頃、応永期（二三九四―一四二八）になっ
てからである。

文明五（一四七三）年三月、革手府城を訪れた一条兼良
は次のように記している。「正法寺のむかひに城をつき池
をふかくして軍壘のかまへをなせり」。府城は美濃国禰宗
の総本山ともいふべき正法寺に向いあい、守護代斎藤妙椿
が常住している。また近くに妙椿の猶子利国の館があり、
「武器どもとりならば、なに事もあらばすなわち打立べき
用意」をしている武士がみられる。¹¹ 西には小守護代石丸利
光の居る船田城がある。発掘の結果規模が大き過ぎるので、
守護に関係する施設でないかといわれる。¹² 一般武士の集住
は余り考えられず、居住しても永住ではなかつたろう。

一方大乱の影響があつて少なからぬ公家が下向し、居住
している。正法寺には一〇を数える塔頭と思われるものが
付属している。

これに対して商工業の状態はよく分らない。わずかに正
法寺の真東に市があり、また塵肆市向の文字から恒常的な
店が察せられるだけで、具体的なことは分らない。史料か
らうける感じは守護ないし守護代クラスの武士と寺社、そ
れに一時的だろうが公家の比重が高く、商工業者はいな
かつたといえよう。なお船田城は発掘調査されたが、革手
城はされていない。

千沢（信濃） 諏訪上社大祝の拠城千沢城の東北麓に
城下がある。発掘は八パーセントに止まるが、幾つかの
興味ある遺構が認められる。一三世紀後半の町屋敷と思わ
れる所では堀立柱建物や方形堅穴があり、棚による区画と
方形井戸が出土する。井戸は共同のもので多い。安国寺の
僧房地域には整然とした屋敷割があり、基壇をもつ建物跡、
堂宇を思わす礎石建物それに佛教関係の遺物が出土する。
鎌倉幕府が亡び、中先代の敗戦で諏訪氏は打撃を受ける
が安国寺は建立される。それを機に町の区画が整理され、
大溝切りとか柵による再区画があり、工房に使用したと思

われる方形竪穴住居が目立つ。井戸・曲物が大形化した人口増がうかがわれる。

一四世紀後半から一五世紀中期になると、在地系の陶器に交って瀬戸・美濃系も多く、青白磁の中国輸入も少なくない。堀立柱建物が大形化し、井戸も多様になる。しかし文明一二(一四八〇)年の悪党による焼き討ち、上社諏訪氏の内紛、同一四年の大洪水により町は急速に衰える。陶磁器は一五世紀後半からみられなくなる。

大祝神氏の居館と神殿、家臣団屋敷地、商工業地、寺院屋敷地それに耕作民居住地はそれぞれ区画されている。なお東大町・西大町・十日市場の商業地域は広い。

原田伴彦氏は応仁・文明頃までは市を枢軸とする農村集落の域を脱しなかったが、天文(一五三二―一五五)・永祿(一五五八―一七〇)期頃には町屋に変質し、手工業者が定住すると述べたが、藤森明氏は応仁・文明前半を最盛期とし、その後町は急速に衰退するとする。また原田氏は領主・町民・農民の各階層の居住は錯綜し、町屋配列も雑然たる自然発生的な散居の状態を呈していたとするが、藤森氏は堀の仕切りなどからことに寺院屋敷地と町地において区画がみられるとする。両氏という都市域は上原城下とか

らまって若干ずれているようで、今後の調整が必要である。なお千沢城下とあるが、藤森氏は諏訪上社大祝神氏の本拠だから城下町といえぬが、といって門前町ともいえないとする。また発掘は一〇分の一にみたないから全貌の解明には時間がかかるといわれる。

伴野(信濃) 『一遍上人絵伝』によると、弘安二(一二七九)年一遍は伴野の市庭の在家で別事念仏し、その後小田切の武士館で踊り念仏を始めたことされる。ついで大井太郎の屋敷で三日三晩踊り念仏を行なった。

当時ここには伴野氏か野沢氏が住み、平安末ないし鎌倉初期に伴野城が築かれた。ほぼ二町四方の広さがあり、薬師寺・金台寺、飯繩社も所在していた。城跡は東西七四米、南北一一〇米ある。館の東側を流れる千曲川には水運があり、西側は鎌倉街道の古道に接している。ただし市場はひっそりしたもので、市日以外は数軒草葺堀立小屋が散在しているに過ぎなかった。

しかしそれから五〇余年後の建武二(一三三五)年には、伴野庄二日町屋の住人太郎三郎淨阿が年貢を銭にかえ、京都のさかた入道らの割符で送った。野沢村百姓に小四郎光重・ 郎入道・道忍ら三人の町屋商人がみえる。この町

屋はかつての伴野市が町屋に発展したものである。伴野館の北方跡部に、町屋先・上町屋・下町屋の地名があり、その頃館を中心として町屋が並んでいたと思われる¹⁵。

その後伴野氏と大井氏の戦い、伴野一族の争いもあり、館は防衛強化のために外郭を設け、二町四方の広さを土居と堀で囲み、野沢城といわれるようになった。

伴野氏は文明頃に、そこから西方二軒の前山城にも拠点をもった。「高柳層去一里、友野殿在所ヲハマイ山ト云、四方有沼田、三方八町、山城也」がそれで、ここには城下の町がみえる¹⁶。前山付近は片見川・清水川をめぐらした湿地帯である。上木戸と下木戸の地名があり、その間の巨離は一・一軒ある。木戸は出入口に設けられた設備で、これを境に内と外が分けられる。内はむろん城下で村と区別された所つまり都市となる。そして両木戸に挟まれた内部に庄内屋敷、三ヶ所の居屋敷・茂木屋敷・竜岡屋敷の地名がある。茂木・竜岡は武士名だろう。それ以外に若宮八幡・竜角寺がある¹⁷。

ここは後に武田・徳川軍が使用した。しかしその時は前進基地に過ぎず、城下に大規模な集落を営む余裕がない。現存の居屋敷と地割などはそれ以前の伴野時代のものとさ

れる。とすれば遅くとも文明頃には前山城を中心とし、その麓の上木戸と下木戸の間の地域に村落と異なる集落空間のあったことが認められる。

祇園（下野） 小山氏の本拠は鷲城であり、祇園城は支城であった。康暦二（一三三八〇）年から永徳二（一三三七）年に及ぶ小山義政の公方氏満への反乱と自刃後に、結城泰朝が祇園を本城とした。その東数百米のところ鎌倉道ぞいに天王上宿がある。祇園城の南に長福・鷲の二城があり、北に善提寺の曹洞宗天翁院や天台宗興法寺などがある。守護神祇園社も鎮座する。

これら諸城、寺社、宿などを含む三ないし四軒にわたる領域が城下を形成している。その中には田畠・山林などが含まれていたろう。そして周縁部には馬野路口と四ヶ布口があり、坂・切通道もある¹⁸。その領域は周辺の領域から区別された場所なのである。

稻村御所（岩代） 現須賀川市の郊外の北から西にかけて御所宮前・御所宮・御所館という三ヶ所の御所名がある。なかでも注目すべきは大字稻の御所館である。この西三〇〇米に中館、北六〇〇米に新城館がある。また御所館を中心にして半径二軒以内に館ノ内・東屋敷・西屋敷・城

の内また下城・古館の地名がある。御所館の東北四軒に御所宮前、五軒に御所宮がある。

南北朝統一のなった明德三（一三九三）年正月、將軍義満は鎌倉公方と妥協を計るために、すでに二年前から須賀川にいた公方氏満の弟満秀の国人支配を認めた。その居城が御所館とされる。ついで応永六（一三九九）年に氏満二男の満直がつぎ、稻村御所とよばれた。ところが正長元（一四二八）年頃から幕府と鎌倉幕府が対立し、將軍義教は公方持氏を討ち、これに関わつて満直も殉じた。こうして応永六年から永享一二（一四四〇）年まで御所であつた稻村の奥州府は四一年で亡んだ。

ここには土塁と空堀が現存している。規模は東西三〇〇米、南北四〇〇米あり、高さは一五米である。館とか屋敷には重臣を主とした武士が住んでいたろう。御所館の東三軒には八幡神社がある。鶴岡八幡宮から勧請したと伝えられ、御所の守護神となつたろう。御所館の南に徳玄、西に勇千代の地名がある。徳玄は医師、勇千代は遊女らしい。長沼とか白河から御所へ来る旧街道に問屋・浮久女・書人などの地名がある。口碑によると、御所館を中心として三〇〇をこえる戸数があつたらしい。これらからみて御所を

中心として東西・南北それぞれ四軒の地に城下が予想できないだろうか。なお発掘調査はなされていない。

十三湊（陸奥） 安藤氏の本拠地十三湊に所在する福島

城は一四世紀に築造とされていたが、発掘の結果一一世紀の土器が出土したのでその頃の築城の可能性がみえてきた。この地は三津七湊の一つと記される代表的な港で、一四世紀につくられた港の土塁も確認された。

土塁の北側には安藤館があり、その西側を走る南北の中軸街路をこえた南側に寺院はじめ町屋の存在することが明らかにされた。福島城はやく六五町の外郭と一辺やく二〇〇米の内郭からなる大規模なものである。内郭の土塁は基底部で幅約六米、高さ約一・六米の堅固なもので、外側に幅やく五米深さ約二米の堀が確かめられた。

こうして一四世紀中頃から一世紀にわたり計画的に都市が形成された。堀、幅二・七米の道路、竪穴建物、井戸が認められる。この他道路に面した建物二軒があり、間口五米、奥行一五米で板塀で囲まれている。一軒ごとに井戸があり、出入口がある。中軸道路の他にも街路があり、短冊型地割も認められる。

町並はさほど大きくないが、南北朝時代に著わされた「十

三往来^{さんわらい}」には「夷船商船群集」と記され、室町時代の御伽草子『御曹子島渡』には北国や高麗の船が入港したとある。⁽²⁰⁾

寛政元(一七八九)年から三三年かけて書き記された

『東日流外三郡誌』によると、天仁元(一一〇八)年に千

余の商家、建久八(一一九七)年に十三湊三千軒とある。

誇張だが、本来の港に城郭が建ち城下が形成されると共にかなりの繁栄をみせたのは事実であろう。函館市志海苔町で発掘された三七万余の古銭に、安藤氏が関わっていたらしいこともこれを裏すける。⁽²¹⁾

その後八戸の南部氏が台頭し、そのために嘉吉三(一四四三)年に福島城が落ち安藤氏は蝦夷へ逃れた。これにより城下町は終わったが、港の繁栄は続いたようである。

府内(越後) 越後の守護所は鎌倉時代は五智国分寺に

あったが、南北朝動乱を契機にその東三軒の府内に移った。

康永年間(一二三四―四五)に建立された安国寺があり、

十利に列する至徳寺が至徳年間(一二三八―四一八七)に建立された。安国寺は最盛期三〇坊を数え、寺域は数町四方に及んだようである。字前屋敷の方二町半の地域を幅六米、

深さ一・二米ほどの堀が廻っており、守護館でないかとされる。ここには守護代館とか有力国人屋敷がある。北二軒

に直江の津があり、そこには海運業をする直江の町と製塩の小町がある。長享二(一二四八)年万里集九の和歌に宿などがみえている。

直江の津には曼荼羅寺・華園観音それに直江館があり、そこと府内の間に府中八幡宮・岡前寺・日吉社がある。守護上杉房定(？―一四九四)は越後上杉氏の最盛期を築いたといわれるので、一五世紀にはこの地に城下が存在していたとみてよい。⁽²²⁾

小木(越後) 国人小木氏の城館地である。東西四〇〇米、南北三〇〇米の範囲に多くの郭があり、大規模な堀切、土塁がある。三本の道路がT字状に直線的にのびている。鍛冶屋敷・紺屋・中茶屋・蔵屋敷などの屋号が残り、東側の谷にも古屋敷・町屋敷の地名があつて一五世紀末から一六世紀にかけての城下が予想される。

ただ出土遺物をみると、中国からの輸入陶磁器は一三世紀から一五世紀のもの、瀬戸・美濃焼は一三世紀末のもの、越前焼は少なく一四世紀のものである。これらかみる限り城館の存在期間は一二世紀後半から一五世紀までと考えられ、時期をめぐる検討が必要である。なお近くの番場遺跡からは一二世紀後半から一五世紀前半の屋敷が検出されて

いる。

夏戸（越後） 上杉氏の武将志駄（志田）氏累代の居城

である。応永一（一三九四）年から同一九年頃に築城したとされる。居館は現在の本光寺境内にあったようで、境内は東西七〇米、南北六〇米の広さがある。志駄氏には神仏に厚い信仰をもつ人が多い。仏門に入った六代定重、寺院の改修を計った一一代房義、入道を称した二二代景義と一三代春義らである。館小路・館の内・御茶所の地名があり、集落の中心部の横町、上町・中町・下町・大谷町は城を囲むようにしてあり、南北に走る幹線道路とT字型直交の小路が幾つかみえる。中町・下町には大きな武家の屋敷割があり、間口が狭く奥行の長い短冊型の町屋が残っている。

城下は一挙に成ったよりも応永年間（一三九四—一四二八）から序々に整備されたろうといわれる。慶長三（一五九八）年上杉氏が転封され、志駄氏も随従したので廃城となった。なおこの時は一五代義秀で、移封後は酒田武将として五一〇〇石を領有した。

その他これに類するとみられるものに、小国氏の天神山城、斎藤氏の赤田城、加茂氏の上条城などがある。

福岡（備前） これまで何度か触れてきた。ことに基盤

割の整然とした町区画、多くの小路と町名、道路にみられる歪と町並にある「ひだ」などが注目される。殿町があり、近くに福岡城址があるから城下町とみてよい。事実ここは南北朝時代には重臣の拠所であり、その後守護所ともなっている。そして文明一五（一四八三）年に備前の応仁大乱といつてよい福岡合戦があり、その後政治・軍事上の要衝でなくなった。したがって現在も残る小路・町名それに街区はその頃までのものとみられる。

だが余りに整いすぎ、戦国末期から江戸時代にかけての街並のようである。その点でいつ頃の城下かと疑問と興味をもっている。平成四（一九九二）年に殿町を中心に三〇平方米発掘がされた。出土遺物は江戸時代のものが九五パーセントを占めているが、平安後期から室町初期の丸瓦、鎌倉期のすり鉢片なども出土し、大いに期待をよせたが、発掘はそのまままで止っている。まあ長年守護代所であった三石は調査がされていない。

御堂宇（安芸） 高屋保地頭であった平賀惟長が弘安年

間（一二七八—八八）に高屋城を築き、南北朝時代にここを本拠とした。応永一一（一四〇四）年安芸国諸城主連署契状に署名し、守護山名満氏に対抗した。その後大内氏に

従い各地に転戦した。文龜三(一五〇三)年弘保のときに東南四軒の白山城に本拠を移している。⁽²⁹⁾

御園宇城の西北数百米に平賀家墓地の明道寺跡がある。

背後に、タタラ、城郭の北にトギ、南数百米に番匠免・馬場・カチャ奥・古市の地名がある。寺社名の円満寺・西寺・西光寺・福寿寺・円福寺・淨福寺・金剛寺・七社大明神・天神などがある。これらを見ると、一五世紀までこの地に城下のあったことが推定できる。⁽³⁰⁾

平成二(一九九二)年に平賀氏の築城した頭崎城跡が発掘調査されたが、御園宇城については予定がない。

二山上(因幡) 因幡守護山名の拠地は二上山である。

築城は貞治二(一一三六三)年幕府帰順後で、標高三三四米の高さである。その南で高野坂川上流に大屋敷の地名が残っている。七五〇―九〇〇坪の広さがあり侍屋敷といわれる。北麓の小田川支流の万願寺川・谷川流域に町屋があったとされる。昭和五五(一九八〇)年の『二上山城址調査書』に、明治四五(一九一二)年の地籍図に南屋敷・中村屋敷・横井屋敷・田中前・上丈夫谷の地名があり、家臣屋敷とみられると述べている。文正期(一四六六―六七)ないし応仁大乱頃に山名勝豊が気高郡天神山に築城し、二

上山城から移った。⁽³¹⁾

これから見ると、二上山城に残された屋敷はそれ以前のものともみてよい。市など商業に関係したものはないが、少なくとも武士たちが集まった初期城下の景観があったのではないかとみたい。その後発掘調査はされていない。

山口(園防) 大内氏が吉敷郡大内村から山口に本拠地を移したのは観応(一一三五〇―五二)頃といわれる。山口は洪水に見舞われ易く農耕に不適な地とされる。その後ここがどうなったかは不明である。ただ康応元(一一三八九)年、將軍足利義満の厳島参詣に随従した元網の書いた「鹿園院西国下向記」に以下のように記されている。府中(周防)で世余才の法師から社寺の歴史を聞き、ついで大内のことを聞いたところ次のように語った。「是より西に松山の遠く見えたるを越ゆけハ前後三里はかり、里もなくて山中をはるばると行いてたれハ、府中二・三もあるらんとおほえて、へいへいとしたる里の侍るに、やかたともあまた造ならへて東西南北一門他門ふち人数をしらす、家居ことからしんしやうなる体也、四方大略深山にて、をのつから無双の功所なり、遠近皆分国分領也、数ヶ国の集なれば、田舎なからも奥ある在所と見えたり⁽³²⁾」。府中が二・三ある

ような広い平地に館が多く建ち、住居の様子からみるとかなりの資産をもち数国を支配する領主所在地で充実していると述べている。筆者は大内と記す、大内氏は長年大内にしたのだから無理はないが、ここは山口のことでないかと思う。これだけの記事だけでは都市とは断定できないが、少なくとも大身の所在地でかなりの屋敷を構えた所であり、村落と異なつた景観をもつていえるのではないか。

それから三〇年ほどすると新しい動きがみえる。応永二七（一四二〇）の「国清寺条々」に、市町での僧達の徘徊を禁止するとの項である。国清寺は応永十一年に大内盛見が創建した菩提寺で、後にこの跡に毛利輝元が洞春寺を建立した。ついで長祿三（一四五九）年に「夜中大路往来」が禁止される。これは文明一八・一九年にもみられる。大路がある以上小路もあるだろう。幾筋かの道路網が考えられる。質倉も建ち、長享三（一四八九）年には市町と店屋もみえ、この頃には商業も活発である。³³⁾

現在ここでは調査が進められ、館と一部町屋の発掘も始まっている。館にみると、遺構と遺物は一四世紀のものが極少で、一五世紀後半から一六世紀中頃が大半とされる。

館は一五世紀後半頃までは板・築地塀を伴う溝で囲み、東西の堀の外端は一四〇米あるが、その後一六世紀には一六〇米あり、きちんとした堀と土塁により館を囲っていたとする。³⁴⁾

守護は一五世紀末は政弘である。「大内氏壁書」が政弘の布令を中心収録されていることと合わせ考えると、この頃が城下山口にとつても画期であつたろうと思われる。文明一七（一四八五）年一二月には、「在山口衆之内、少分限之仁事、年中百箇日可給身暇由被相定畢」とみえる。一年に百日の暇を出すとは、言いかえればそれ以外は山口に止まることを命じているのである。つまり家臣たちの集住がみられる。応仁乱後に家臣が山口近在に屋敷地を給わること申請しているし、政庁の機構整備もみられる。³⁵⁾

周知の「山口古図」は近世に書かれたものらしいが、それによると城下は館の西側を南北に走る堅小路と、それに十字に交わる石州街道を軸につくられている。近世の「口屋」（番所）が幾つかあり、古図に物門の地名がつく。おそらく中世の検門所で、「壁書」にみえる夜廻りの場所とみられる。夜廻りは文明十一年に知られる。このように一五世紀の中頃には、山口は周囲の村落と違つた空間を構

成しているのである。文明三年著の申叔舟の『海東諸国記』に、山口が竈戸関（上関）と並んで記されていることからみても、外国人は山口を特に意識していたのである。ただ現在までの発掘状態で見ると、館周辺の武家居住の所と石州街道の市町と共に余り集住がみられない。

厚東（長門） 防長の豪族厚東氏が天曆（九四七―一五七）

頃厚東に定住して居館を構え、長保元（九九九）年に持世寺を創建した。館跡とされる御東に礎石・堀はない。鎌倉初期に厚東川をこえた霜降山に築城した。一四代武実のときに台頭し、元弘の変に長門探題を討ち、足利尊氏の西走のとき兵船を提供し、その功により建武三（一三三六）年二月に長門守護となった。暦応二（一三三九）年御東館の北方に東隆寺を建立し、高僧南領を開山としている。ここは禅宗で二〇余の塔頭をもち、厚東氏の菩提寺である。貞和元（一三四五）年に安国寺に指定された。一方御東館の南方には正八幡宮が貞観元（八五九）年石清水から勧請され、東方には恒石八幡宮が天禄年間（九七〇―一七四）に創建された。正八幡宮は守護神である。建武三年四月尊氏東上のさい恒石八幡宮に参詣している。

御東館を中心として小字名に、安養寺・淨名寺・蔵福

寺・中蔵福寺・東蔵福寺・安国寺・寺脇・普現・若宮・門前・城・城ノ腰・城ノ浴ゆがあり、口碑として福太夫・堂ノ上・報恩寺・十王堂・正法寺などがある。市庭小路もみえる。³⁶⁾

武実が守護となり府中に入部したが、延文三（一三五八）年大内弘世に追われ亡んだ。それと共にすべて破壊されたので史料は残っていない。たゞ寺社は幾つかつづいている。

昭和三八（一九六三）年に厚東郷土史研究会が発足して厚東城と城下再現の努力が始まり、平成五（一九六三）年一月から三月末まで千坪の発掘調査がされた。御東に近い所であり、柱穴一万以上が確認されている。環濠をもつた屋敷と堀立柱建物がみられ、石組の水路があり、土師器・瓦質土器・青磁・石・鉄製品それに中国銅銭も出土した。しかし寺跡がなく遺構は一五・一六世紀のもので、厚東氏時代と異なっている。城下町は存在しようだが、実証は遙かに遠いと発掘した唐沢陽司氏は述べている。³⁷⁾

大野（紀伊） 名草郡大野郡の地域は古く熊野詣の大通りであり、後に高野街道も通るようになった。正平一四（一三五九）年郷内から関米が金剛峰寺に寄進されている。また浦役がみえ港湾の機能も持っていた。建武期（一三三四

一三六に浅間覚心が守護となり、同三年に畠山国清に代つた。至徳二(一三八五)年に山名義理が守護となり南朝を鎮庄し、府中から大野へ守護所を移した。明徳三(一三九二)年二月、大内義弘に攻められたとき義理は「大野ニ有テ」防いだ。応永の乱後に畠山持国が守護となり広に居城を移し、ここは支城になつてゐる。

一八世紀中頃に僧全長の書いた『名高浦四囲廻見』に次のようにみえる。高畑の安右衛門家の所有する一町四反の場所は山名修理大夫義理公の屋敷跡である。また高畑に隣接する宝珠塚にある山名殿の家老箕ノ浦左右衛門佐宅は鳥居の且過跡となり、此所に且過寺または且過堂という寺がある。

この地から南へやく二杆の所に大野城跡がみえる。屋敷跡からは土瓶のような高さ二程程度の焼物が出土した。現在岡本光雄氏が居住し、元馬場の言い伝えがあるそうである。付近には井戸が多く、石積井戸も残つてゐる。高畑一帯は水がすぐ湧き井戸は浅いといわれる。近くに朝倉館、中山屋敷と馬場・屋敷田の地名が残り、朝倉館の周辺には犬馬場・柳馬場の地名もある。また伏拝明神があり、細工谷池・鍛冶場跡も伝えられる。

興味のあるのは館近くに所在する禅林寺の応永七(一四〇〇)年の年貢帳である。ここに中蘆屋敷・近藤屋敷・吉田弥八殿屋敷・中ノ殿・松崎殿屋敷・熊野殿屋敷・飯盛殿屋敷・近藤殿屋敷・宮田殿御ヤシキの名が記される。いずれも一反より少し多い面積をもつてゐる。それ以外に庄司垣内・北垣内・馬場・ナワテ・大門口・下鍛冶給・本大工作などもみえる。

応永七年の「三上庄大野郷御年貢帳」によると、白拍子・傾城・猿楽・番匠・木工・鍛冶がみえてゐる。

守護館でなくなつた後も大野城は支城地であるから、館に接してみえる地名はその後のものかも知れない。しかし応永七年の年貢帳記載の地名はその時点のものである。屋敷名をもつ姓は武士であり、おそらく重臣層であろう。寺社があり、市の伝えがあり、水陸交通の要衝であつたことからみて、この地は一四世紀末には城下の景観をもつてゐたといえよう。

秋月(阿波) 建武三(一三三六)年足利尊氏西走のさい細川和氏が秋月に入部し築城した。この地は天然の城郭のような地形をもち、大西城に拠る南朝の小笠原義盛との抗戦に有利であつた。和氏は城北に補陀寺を建立し、無窓

疎石を開山とした。後にここが阿波国安国寺となる。三代頼之のとき補陀寺の東隣に光勝院を建立して春屋妙葩を開山とした。その後補陀院の南隣に宝冠寺を建てて絶海中津を開山とした。利生塔の建立された切幡寺は秋月の西北一・五軒の所にある。南に日吉神社と八幡神社を勧請している。

地域付近に古町の地名がある。家臣たちの居所かと思うが確かでない。西四軒に市場の地名もあるが、秋月は軍事と仏教色の濃い土地であった。

頼之の弟頼春のとき応安年中（一三六八―七四）に、勝端に守護所を移しここは城府でなくなつたとされる。しかし宝冠寺建立が至徳二（一三三五）年であり、勝端移転後一〇年となるから不自然である。まち頼之は康暦元（一三七九）年管領を辞して下野し、幕府と敵対関係にあった。とすれば海岸に近い勝端よりも内陸の秋月が安全である。幕府と和解し上洛するよういたる明德二（一三九一）年頃に移転が始まつたとするのが妥当であろう。とすれば、この地が守護所だったのは三五年ほどといえる。

隈府（肥後） 菊池氏の本拠は菊の城で、延久二（一〇七〇）年則隆のとき築城されたといわれる。ここは菊池街

道の水陸交通の要地であった。南北朝時代に菊池本城に移つた。しかし武家方に追われて隈部城に移り本城とした。そしてその西南麓に館と屋敷をつくつた。ここがどのような景観をもっていたか分からないが、文明一三（一四八二）年八月一日の万句連歌発句で、守護館と屋敷・亭それに寺院の存在が確認される。屋敷より亭の数がはるかに多く、これは出仕用屋敷とされる。それにしても菊池氏の直臣層中核の家臣統制のあらわれが、武士の集住となつたのだらう。

ところで守護館は東西九二・六四米、南北九七・九四米の広さがあり、有力守護の館よりは少し小型である。また一般家臣屋敷だろうが東西三一・八米、南北二六・五米の小区画もある。南小路・中小路・北小路とよばれる小路からみると、区画された長方形街区の計画都市が予想できる。現在多くの地名が残っている。城下・堀木屋敷・堀ノ内・土井・菊池宿・古町・南古町・中小町・西古町などである。

菊池氏は天文一九（一五五〇）年の義武のでつずき、その後大友氏の支配をうけて、庶流の赤星氏が代り、亡んだのは天正七（一五七九）年である。したがって右の地名が

いつのものか確認できないしかし文明一三年の発句にみえた武士屋敷・亭からみて、遅くともその頃には武士の集住地があったろう。また正観寺が興国二（一三四〇）年に創建され、宝徳三（一四五二）年に十刹となっており、菊池五山も存在する。文明四年には孔子堂を建て聖学をおこしている。連歌も関係するが、古町はそれらに関わる人々の居住地とも考えられる。

館から一・五軒南西に菊池氏の氏神北宮阿蘇神社があり、その一軒南には菊池川を南北に横断する菊池街道との交点に赤星渡があつて物資荷揚げを行なつた。北宮社と渡の間に上市場・下市場の地名が残っている。これらを見る⁽⁴⁾と、ここでは東西二軒、南北五軒にわたる都市的景観を遅くとも一五世紀にみてよいと思ふ。

鹿兒島（薩摩） 島津氏の本拠は北部の木牟礼^{こむれ}にあり、建武四（一三三七）年に守護町がみえる。守護に係する武士層の居住地と思う。この国では南北両朝の戦い⁽⁵⁾がつき、また島津氏内部の總州・奥州両家の内訌もあり、奥州家の氏久が一旦鹿兒島の東福寺城に入ったが、間もなく大隅国志布志に移った。しかし氏久の子元久のときに対立が治まり、多分応永一七（一四一〇）年に鹿兒島の清水城に

移り、ここが戦国初期まで島津氏の城地となる。そして城下づくりを始め、「御親類宗との御内之人々に御移」とみえる。この記事は城下づくりの基本が一家一門の集住であることを示している。同二〇年には侍殿原地下町之ものがみえる⁽⁶⁾。

なお志布志は鎌倉時代から中国、朝鮮との交流があり、宋船が着岸している。氏久は貿易によつてかなりの富を蓄積し、これが総州家を庄倒して統一を進めた理由とされる。この地には松尾城と内城が谷をへだててあり、調査もされている。城下にあたる麓は考えられるが具体的には不明である。

以上個々に述べた城下は様々な空間配置ないし景観をとっている⁽⁷⁾ので、それらの出現した時期、呼称、村落との差、諸機能、地割、道路、規模などについて整理しておきたい。

城下空間の形成時期には地域差があるが、一般に南北朝時代前後からであり、室町中期にいたると多くなる。鎌倉時代までは、守護所は軍事的色彩の濃い権力所在地であり、行政的には府中が一国の中心であつたろう。守護が行政権

を把握した南北朝時代になり、守護所は軍事のみならず宗教的にも重要地となり、宿とか市・町の機能も付属し城下を形成するようになる。

城下という語句はみえない。私はこの言葉を便宜上用いているが、現実にはみられない。東海道線菊川駅の東南五杆に横地城跡がある。この城は鎌倉御家人横地太郎家が築いたとされる。横地氏は室町時代に守護斯波義廉に属したが、文明八（一四七六）年駿河国の今川義忠に攻め亡ぼされた。古絵図をみると、本丸の南麓を城下、西の登り口を御城下町と記してある。横地氏は文明八年に亡んでいるので地名はそれ以前のものでないかと思う。またそこから西南三杆に堤城跡がある。ここは横地氏の家臣松井氏の拠城で、そこにも城下の呼称がある。松井氏は永正期（一五〇四―一二）までみえるから、その頃につけられたかも知れない。絵図と地名だけでは断定できないが、室町中期頃に城下呼称がみられるように思う。しかし一般に城下の語句は戦国時代になってからみえてくる。またこれに類するものとして名和氏の館近くに山鹿町（肥後）がある。山鹿は山下に通じて城下を意味するが、時代を特定できない。その他「保」は鎌倉・平泉にみえるが他にはない。薩摩国の

「麓」は戦国末以降である。国府（常陸）には「巷」がみえるがここだけである。

城下と村落を区別する口（木戸）は古市・前山・祇園にあり、陸奥・筑後の府中にもみえる。ただ城下を包みこむ総構えは古市のみである。しかし住民を指す地下人・在家・地下町の者は農民と違う人々がみえてきたことを意味する。「みやこの外の心地せず」とか「やかたともあまた造りならへて」の文言は下津・山口の特殊例ではないと思う。

武家屋敷、寺社は多く、ことに地名に多く残っている。屋敷とあるのは重臣だろう。ただ永住か転務のためかは分らないし、その向きはまち／＼だったようである。鹿兒島では一族・内者の集住がみえ、山口では集住を強制している。城下づくりの基本が守護らの領主と武士であれば、これらの集住は室町期に始まっているのである。町・市ないし町屋は地名を含めて少くない。ことに複数みえる所のあることに注目したい。町は商工人に限らないが、かれらが少なからず認められる。

干沢とか十三では計画的な地割があり、大路・小路とか丁字形道路もみられる。ただ二〇年前から発掘の始まった

博多をみると、南半に重点がおかれているが次のように述べられている。中世は旧地形に左右された自然発生的な要素が多い。街並は地点々々で方向を異にし、街路は蛇行して一貫性・規格性に欠ける。⁽¹⁴⁾博多は港津だが城下にも適用されるのでなからうか。

城下とみられる地域は広く、領主館から半径二軒あるいはそれをこえる所もある。これは葉梨・祇園・稻村・秋月・隈府などから知られる。なおこれよりさらに広くみる主張がある。越後府中の場合で、東は府中から四―五軒ある保倉川（黒井川）渡しの西、西は三、四軒の五智の西の郷津、その西の虫生岩戸、南は二軒の関川港曲部とする。⁽¹⁵⁾これまで広げるのはどうかと思うが、今後の検討議題としておきたい。

いずれにせよ城下には田畑も少なからずあり、商工業は一定の所に集まっていたのでない。町はあるが市も少なくない。

注

- (1) 『経覚私要鈔』文安四年五月二〇日、宝徳三年二月六日
(2) 田中慶治「中世後期畿内国人層の動向と家臣団編成―大和

古市氏を中心に―」『日本史研究』四〇六号

(3) 村田修三氏の御教示による

(4) 『経覚私要鈔』長禄二年七月一八日

(5) 『大乘院寺社雜事記』文明元年七月二八日、同六年三月二

八日、同一四年二月三日、同一七年二月一〇日、同

一八年二月一五日

(6) 『大乘院寺社雜事記』明応元年八月二九日、同九月一九日

(7) 拙著『守護城下町の研究』一一九頁

(8) 拙著『守護城下町の研究』六二頁

(9) 宮武正登「南北朝期の今川氏と駿河守護所」『国史学』一

三八号

(10) 藪野雅彦「甲斐における守護所の変遷」、金子拓男・前川

要編『守護所から戦国城下へ』

(11) 拙著『守護城下町の研究』一四八頁

(12) 高田徹・内堀信雄「美濃における一五・一六世紀代の守護

所の変遷」、金子拓男・前川要編前掲書

(13) 藤森明「干沢城下における中世大町の景観」『信濃』四七

―二号

(14) 原田伴彦「中世における都市の研究」六八頁

(15) 拙著『守護城下町の研究』一八八頁

(16) 『蕪軒目録』文明一六年一〇月三日

(17) 『佐久市誌』五三八―五八五・五八七頁

(18) 市村高男「戦国期城下町の復元的考察―下野国祇園（小山）

城下町を中心として―」『小山市史研究』七号

- (19) 拙著『守護城下町の研究』二二八頁
- (20) 『月刊文化財発掘出土情報』一八一号、一四頁。『中世都市十三湊と安藤氏』国立歴史民俗博物館編。これは多くの報告と討議などから成っており、いちいち筆者の名をあげない。
- (21) 白山友正『志海苔古銭の流通史的研究』『日本歴史』二八三号
- (22) 金子拓男「上杉氏による越後府中の経営と居城春日山城の成立」、金子拓男・前川要編前掲書
- (23) 出雲崎教育委員会「小木ノ城跡発掘調査報告書」、坂井秀弥「中世小木城下の復原」『新潟史学』二〇号、坂井秀弥「新潟県の戦国城下町について―小規模城下を中心として―」『山梨文研研究報告』二三号
- (24) 鳴海忠夫「夏戸城と志駄氏」『長岡郷土史』二六号、小黒弘「夏戸城の歴史Ⅱ―城下町の成立と志太氏の活躍」同三二号
- (25) 鳴海忠夫「天神山城と小国氏」同二七、『岩室村史』八七頁
- (26) 磯貝文嶺「中世赤田郷をめぐる渡辺(赤田)並びに斎藤氏に関する史的考察」『柏崎・刈羽』一〇号、『刈羽村物語』一一九頁
- (27) 鳴海忠夫「加茂氏上条城跡について―要害の縄張りを中心として―」『加茂郷土誌』一七号
- (28) 拙著『日本中世都市の研究』二二七頁
- (29) 阿部猛「安芸国の平賀氏について」『帝京史学』九号
- (30) 拙著『中世城下町の研究』二〇六頁
- (31) 谷村信之「二上山築城記についての考察」『郷土文化研究』八号
- (32) 『鹿苑院西国下向記』『山口県史料 中世編上』
- (33) 拙著『中世城下町の研究』二四一頁
- (34) 古賀信幸「守護大内(多々良)氏の居館跡と城下山口―大内氏館跡の発掘成果から―」金子拓男・前川要編前掲書
- (35) 松岡久人「大内氏の発展とその領国支配」『魚澄惣五郎編』大名領国と城下町
- (36) 沖金五「御東館(厚東城)にまつわる私考」『厚東』二二六号 沖金五「厚東の歴史と伝承」
- (37) 唐沢陽司「棚井上遺跡」『厚東』三六号
- (38) 『明德記』下
- (39) 『和歌山県史 中世史料2』。なおこの調査に関しては大野城跡研究会の平岡繁氏に非常にお世話になった。
- (40) 拙著『守護城下町の研究』二三〇頁
- (41) 本田昇「細川氏初期守護(所秋月)について」『阿波、歴史と民衆』Ⅱ、本田昇「守護所秋月城存立期間についての一考察」『史窓』一一号
- (42) 青木勝士「肥後菊池氏の守護町限府の成立―一五・一六世紀の地方政治都市構造の復元―」『熊本史学』七二―七三合併号
- (43) 拙著『守護城下町の研究』二四四頁

(44) 大庭康時「中世都市から近世都市へ―発掘成果から見た一六・一七世紀の博多―」『福岡県地域史研究』一三〇号

(45) 斎藤利男「越後府中と直江の津―中世都市の二つの顔―渡辺信夫編『近世日本の都市と交通』」

あとがき

中世の城下町を調べていつも思うが、一つの所について始めから一貫した発展経過を追えないことに気がつく。城下町をつくる権力者は武士であり、その拠点守護所から城下形成が始まる。そして完成期が織豊時代となる。守護城下から戦国城下まで連続するものは少なくない。ただ場所が同じであっても、そこでの空間配置なり景観なりの変転が把握しうるのはごく一部である。ことに武士の場合は権力交代が多く、亡ぶと文書・記録が消えてしまう。その結果城下の実態は分らなくなる。

だが完全に消滅してしまうのではない。江戸時代の地誌にみえ、あるいは人々の記憶に残って後世に伝えられ、城館などの遺跡として存在するものも少なくない。したがってそれらを手がかりにかつての城下を復元することが可能である。復元の第一歩は現在のところ発掘にあると考える。

文献のある地でも発掘が重視される、ない地は尚更である。しかし地券がからんだり発掘専従者の不足などから手つかずとか中断も多い。この例は本文で触れたが、それ以外にも多気(伊勢)・上ノ平(信濃)・野市(加賀)・神辺(備後)・甲山(安芸)・羽衣石(伯耆)・倉吉(伯耆)・八代(肥後)などがある。平泉・十三などでは発掘により新しい事実が発見されている。発見は発展につながる。戦国期以前の城下は現在では多く漠然としているが、発掘が始まり進めば、より具体的に明らかになることは疑いない。これを将来に期待したい。